

平成 24 年度 第 6 回 びわこミ会議運営委員会 議事録

日時	2012 年 10 月 9 日 (火) 18:15～20:30	
場所	県庁北新館 5-B 会議室	
出席者 (50 音順、 敬称略) 斜線は初参 加	井手 慎司	滋賀県立大学環境科学部
	石河 康久	滋賀県琵琶湖環境部琵琶湖政策課
	大内田史奈	滋賀大学
	岡本 高弘	滋賀県琵琶湖環境科学研究センター
	川端 隆弘	公益財団法人 淡海環境保全財団
	木村 道徳	滋賀県琵琶湖環境科学研究センター
	北田 俊夫	NPO 法人 びわこ豊穰の郷
	小林 泉	滋賀県琵琶湖環境部琵琶湖政策課
	佐々木和之	水色舎
	佐藤 祐一	滋賀県琵琶湖環境科学研究センター
	城木 信浩	トボス企画事務所
	正阿弥崇子	滋賀県琵琶湖博物館 環境学習センター
	菅原 芳明	滋賀県農政水産部農村振興課
	関 慎介	滋賀県琵琶湖環境部琵琶湖政策課
	田仲 輝子	滋賀県琵琶湖環境部琵琶湖政策課
	辻 光浩	滋賀県流域政策局 流域治水政策室
	中野 隆弘	びわ湖エコアイデア倶楽部
	中村 大輔	滋賀県 びわ湖フローティングスクール
	根木山恒平	NPO 法人 碧いびわ湖
	野田 晃弘	NPO 法人 蒲生野考現倶楽部
	平山奈央子	金沢大学 男女共同参画キャリアデザインラボラトリー
	松沢 松治	びわ湖の水と地域の環境を守る会
	三和 伸彦	滋賀県琵琶湖環境部琵琶湖政策課
	村上 悟	NPO 法人 碧いびわ湖
	村上 真規	野洲市環境課
	望月 孝幸	滋賀県琵琶湖環境部琵琶湖政策課
安岡 郁弥	滋賀大学	
谷内 茂雄	京都大学 生態学研究センター	
山口美知子	滋賀地方自治研究センター	

※今回欠席(敬称略)：伊吹美賀子(琵琶湖流域ネットワーク委員会)、堀彰男(滋賀県魚のゆりかご水田プロジェクト推進協議会)、渡辺維子(元：公益社団法人滋賀県環境保全協会)

9月16日(日)に開催された第2回マザーレイクフォーラムびわこミ会議について、運営委員会委員の他関心を持つ参加者が集い、反省会を行った。提示された意見を以下にまとめる(内容ごとの整理)。

1. 第1部(ML21 評価会議)

- ・ 第1部の結果を県民がどう受け止めるかが不明である。
- ・ 第2部のふりであり、単独の評価ではないと思っていた。
- ・ 消化不良であった。指標や目標そのものに対するパネリストの意見がよかったとするアンケート結果もあったが、何がよいと感じたのか聞いてみたい。
 - 指標や目標が自分事になっていないということから、その根本に関する疑問が提示されたのだと思う。
- ・ 「評価会議をどう進めるか」と解釈すれば、1年目としては先日のような議論でもよかったのでは

ないか。

- ・ 「予測がつかない琵琶湖」という認識を松沢さんと共有できたが、そのことを会議の場で伝えられればよかった。

2. 第2部(ワークショップ)

(1) 全体

- ・ 話し合ったことをどう計画に活かしていくのかを情報提供して欲しかった。
- ・ 各自の気づきやコミットメントを次回会議でどう活かすのか、その仕組みが必要である。

(2) 分科会の進め方について

- ・ ワークショップと受け止められたため、聞いていることが中心の進め方に聴衆が耐えられなかった(アユ班)。
- ・ 「つながりを取り戻す」対象は魚に限らないため、議論の内容もそのように進められた(メダカ班)。
- ・ 来場者の意見をもっと議論に組み入れられればよかった(フナ班)。
- ・ 分科会前のナビゲーションをきちんと聞いていたら、進め方も理解可能であったと思う。
- ・ 自分なりの課題や方向性を準備していたが、聴衆がフリーに話し出したためにそれを伝えることができなかった(アユ班)。
- ・ 「魚の分断についてどう伝えるか」が元々のテーマであったが、昼食時の話し合いで、子どもの環境学習だけでなく生涯学習(社会教育)にまで広げて話し合うことにした。しかし分科会ではそのことについて十分伝えきれなかった(メダカ班)。
- ・ 「多くの意見からまとめていく(広い関心に着目)」ことと「先駆者の情報から今後のヒントを見つける」ことの両方のニーズがあり、分科会の中で乖離していた。参加意識に応じたテーマもしくはグループの設定が必要だったのではないか(例えば、パネリストの意見を聞く場と、参加者が活発に意見する場を分ける等)。

(3) まとめと対談について

- ・ 報告時に「課題」と「方向性」をうまく伝えられなかった(メダカ班)。

3. びわコミ会議・ML21 計画全体

(1) びわコミ会議全体について

- ・ 初めて参加して、「なぜ魚なのか？」などこれまでの議論を知っておきたかった。
- ・ 全体を通じて説明が丁寧であると感じた。
- ・ びわコミ会議の開催地を変えていくことで、参加者の顔ぶれが変わる。
- ・ びわコミ会議として、子どもが参加して話し合えるような場を設けてはどうか。
- ・ ここでしかできない枠組みがあるかが、びわコミ会議の必要性を感じてもらう上でのポイントである。
- ・ 市民に話を聞き行政に反映させる取り組みは、全国でも成功していない。滋賀は頑張っているの、これからも続けていくことが必要である。
- ・ 現在の琵琶湖を巡る問題は極めて複雑である。だからこそ課題が何かを話し合い、今後各自ができることを提示しようと今回のびわコミ会議を開催したが、理想通りにいかない面もあった。第1期計画時にも流域ネットワーク委員会というものがあり、形式上は地域の意見を吸い上げたり

共有したりする仕組みはあった（でもそれは機能しなかったと言われている）。どうすればよいか、今は正直よく分からない。

- 流域ネットワーク委員会は団体の代表が集まる団体間のネットワークであった。しかし今後は（必ずしも団体に属さない）個人間のネットワークに広げていくことが必要である。
 - 流域ネットワーク委員会は官製団体であり、自分たちで作りに上げるといったものではなかった。
- ・ 頑張っている人は頑張っているが、そうでない人も多い。今回は活動していない人にも来て欲しかった。頑張っても良くならないのはなぜかを考えたかった。

(2) 普及啓発の必要性

- ・ 県民に知ってもらうという観点からは、アピール不足であると感じた。
- ・ 地域の団体との連携を考えた場合、運営委員会だけでは十分ではない。
- ・ 地域の先進的な取り組みを ML21 計画として位置づけることで、皆が ML の一員と認識することができる。
- ・ 「豊かな湖づくりフェスティバル」には 98 団体数千人が参加し、皆で一体感を持つことができた。参加団体には最大 10 万円の支援があった。
 - 「淡海の川づくりフォーラム」は、「豊かな湖づくりフェスティバル」とはまた違った位置づけの取り組みであり、代替できるものではない。
- ・ 県内の大学との連携があるとよい。普段大学にいてもそのような機会を知ることができず、県からもっと呼びかけて欲しい。
- ・ 企業の参加が少なかった。びわコミ会議が企業活動にとっても価値があるということを伝えきれなかったことが原因と考えている。企業活動につながる事例をつくれれば参加企業も増えるかも知れない。
- ・ 県外への PR はどのようにしたか？
 - マスコミ 25 社、NPO 等 162 団体、各市町、環境事務所、発起人等に個別に広報。結果、事務局スタッフを含め 154 人の参加。
 - 今回の結果についてフィードバックが必要。

(3) 県と市町・地域との関係

- ・ 県と市町の間をフラットにしたいが、そうはなっていない。県が市町に信用されていないし、また立場が上と見られてしまう。
- ・ 市町からすれば、具体的なメニューがない中で一緒にやりましようと言われても困るし、ゼロから考えるとなれば大きな労力を伴うものになるので避けたい。
- ・ すでに進められている活動を県として評価（どう役立っているのか等）していくことも必要。
- ・ 参加したお互いにメリットがあることで、一緒に動くことができる。
- ・ 行政としては、各地の取り組みと連携し、施策への反映を目指すこととしている。
- ・ 県がびわコミ会議のことについて市町に相談に行くなど、びわコミ会議と県との関係がよく分からない。
 - 県は他のメンバーと同じ一参加者であるが、市町への相談に行ったのは結果として県職員であった。

4. 今後の予定

- ・ 来年は 8 月に第 3 回びわコミ会議を開くこととしたい。今後 1 年弱のうち前半では、マザーレイク

- フォーラム全体に関する議論を深めていきたい。
- 今回初めてご参加いただいた方には、今後も運営委員会等の開催連絡をしていく。

以上

【当日のホワイトボードのメモ】

全体を通じた感想

谷内) ・オ1部 → 県民がどう受けとめるか不明
 ・オ2部(ア2) → WSと受けとめられた(持ちきれなかった)

平山) ・全体での報告で反省。「成果と方向性を話せた」
 ・「つながりを取り戻す」→ 魚に限らない

菅原) ・来場者のイケンをもと組み入れられれば良かった

城木) ・それまでのギロンを知っておきたかった。なぜ「魚」か?

正アミ) ・説明が丁寧(同じ説明を2回)
 ・WS前のナビゲーションを聞いていたら進め方も理解可能
 ・話し合えたことをどう計画に活かしていくか → 情報提供
 ・オ1部はオ2部のフリと思えた(単独の評価でなく)

村上) ・オ1部、消化不良。前回のコメント、何が良かったか聞きたい。
 過) ・各自の負担とコミットメント → 次回に活かす仕組み必要
 ・行政も意見を受けとめ、お互いかまえて考える
 中村) ・「魚の分類をどう教えるか」→ 小学生だけでなく(参加者) 生涯学習まで広げる
 ・子どもが来るほどどの参加者

岡本) ・「評価をどう進めるか」と受けとめられた(1年目)
 ・「本測りがつかないびわ湖」を松沢さんと共有、話せばいい

佐々木) ・①多くのイケンをもとめる、広い関心(か)いり。
 ②先進者の情報からヒントを見つける
 ⇒ 参加意識に応じたテーマ設定(OR グループ設定)

北田) ・びわ湖のアピール不足 = 県民に知ってもらう
 ・地域の団体との連携 → 運賃だけでは弱い
 活動 ML21として位置づける

松沢) ・地域の先導的取組に びわ湖が入っていく
 結果として地域のことがびわ湖の計画につながる
 ・価値地を変えていく → 顔ぶれ変わる
 皆がMLの一員と意識

三和) ・フラットな関係にしたいがそうない
 → 県が市町に信用されない、上と見られる

村上) ・メニューが同じ中で一緒にやるというのは大きな労力
 悟) ・前回の気持ちは理解、自分事にならない指標、目標
 ・既に進められている活動を果として評価(どう後立、どうか)

北田) ・湖づくり会議(加田)は皆で一体感あった

松沢) ・川づくりに意義を感じない団体もある

佐々木) ・「ここでしかできない枠組みがあるか」+お互いのコミット
 ・一着に對

松沢) 多くの市民に知ってもらえたのが良かった(数千人参加)

野田) 98団体に最大10万円の支援

岡本) 県内大学との連携 ← 県の呼びかけ

オカサ) 大学にも届けて

木村) 市民に話を聞いて行政に反映させる取組、成功してない
 しかは頑張ってる、続けることが重要

山口) 内題が複雑、理解してる人は頑張ってるが、そうでない人も多い
 ・今日は活動してない人にも来てほしい
 ・頑張ってる人も落ちる? 頑張ってる人も落ちるのはいないの?

井手) 個人のNetworkへ
 団体でなく

中野) 企業の参加が少ない ← 企業活動としての価値を伝えきれない
 ・社会教育の延長線上に環境学習
 ・事例をつくれば企業参加増えるかも

野田) 県外の関心ある人のPRは?
 マスコニ25社
 NPO等団体162
 各市町、湖づくり
 発起人
 → 154人参加

栗年の8月に3回目びわ湖
 ← その前に昨年ほどMLF全体のギロン

板本) びわ湖 ← 県

やりたこと

MLをより多く知ってもらう

ML21の評価をする

課題を共有し
方向性をギロンする

マゼシクフォーラム

びわ湖会議

こひん水F

野洲湖水F

川づくりF

市町F

フォーラム(発起人)に

— 以上 —